

「倭の五王の謎」

増山雄三

五世紀に倭国が中国に使節を送り、中国の史書である「宋書」や「梁書」に、中国風の名前で記された、「倭の五王」の「讚・珍・濟・興・武」は、古事記や日本書紀に登場する、「第十五代から二十一代天皇」の誰かだと考えられていた。

それでも、それらを「訓読み」にして、八世紀に成立した、記紀の天皇に当てはめる事ができないのは、五世紀の日本には、まだ訓読みがなかったからで、そこに記された大王継承順は、直ちに信用できない。

さらに、その後の研究で、五王の継承関係に合致するとみられる天皇は、実際の在位の年代がずれるなど、幾つかの矛盾が生じるので、特定の天皇と解釈するのは、いささか無理がある、という考え方が示されている。

当時、中国は南北に分れて、度々にわたって王朝が興亡を繰り返した南北朝時代で、倭国の使節が向かったのは、四一〇年から五十九年まで続いた南朝の「宋」だった。

そして、その滅亡後に編集された、宋の正史である「宋書」の「倭国伝（正式には夷蛮伝倭国条）」に、五人の倭国王の名が出てくるが、宋の二つあとの王朝だった、梁の正史だった「梁書」の中にも、漢字など若干違う五王の記述があるものの、成立が遅いので、信用度はかなり落ちる。

それで、宋書で最初に登場するのが「讚」で、その使節が四一二年、建国してまだ二年しかたっていない宋に、貢ぎ物を納めその見返りとして、讚は宋から官位官爵を賜るが、具体的には、「倭国王」とも一つ、中国の東を守る「安東將軍」に認められ、それによって、倭国は宋を宗主国とする、従属国になっってしまったのである。

それでは、この讚と言う人物は、古事記や

日本書紀に出てくる天皇の、いったい誰に当
てはまるのだろうかという疑問が起るが、記
紀の成立時期には、応神とか仁徳といった、
漢字二文字の表記はまだない。
そこには、ホムダとかオオホサザキなど、
和風の呼び方があっただけで、それを、漢字
の音を借りて、ホムダなら品陀とか誉田とい
うように、記紀がそれぞれ違う表記の仕方を
したので、従来は、その名前の読みや系譜を
基にして、五王がどの天皇なのかという議論
が、長いあいだ続けられてきたのである。
それで、讚は訓読みなら「ホム（誉む）」
なので、ホムダ、すなわち後に応神と名付け
られる天皇ではないか、いや、音読みが「サ
ン」なので、「サ（ザ）」の発音を含むオホ
サザキ（仁徳）カイザホワケ（履中）だろう
といった具合である。
古代史の大家である上田正明も、著書であ
る「私の日本古代史」に、「讚が履中なら、
讚の弟だという珍は、履中の弟の反正になる

ので、齊は珍との続柄が不明だが、反正の弟の允恭だろうし、次の興は允恭の子、安康であり、武は訓読みが「タケル」なので、ワカタケルすなわち雄略でいい、と書いている。しかし近年、これに対して、決定的とも思える反論⁸が出たのは、やはり日本古代史が専門の、河内春人関東学院教授の著書「倭の五王」の中に書かれたものに、漢字の訓読みが五世紀の倭国で成立していたとは、現在の研究水準では考えにくい、というのだ。

それに対し、日本語学が専門の沖森卓氏の説では、訓読みが確認できる最古の例は、六世紀後半の、出雲の岡田山一号墳（島根県）から出土した鉄剣の銘で、八世紀の記紀にも当然、訓読みが存在するというが、しかし、五王が生きた五世紀には、音読みしかない。それで、漢字を使う中国語の発音を、日本人は日本人なりに発音していたが、埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣には、「獲加多支鹵大王」とあって、それを音読みすると、

「クワク・カ・タ・キ・ル」で、それはつまり、「ワカタケル」の事である。しかし、その時代でない訓読みを根拠に、武がワカタケルと断定するのは無理で、先の河内教授は「記紀の系譜を前提として、『宋書』とすりあわせること自体、あまり生産的な作業とは思えない」という。一方で、「宋書」を重視する研究者の間では、讚・珍グループと済・興・武グループと
いう、「二つの王家」があったとする議論も続いて、大王墓の調査が進めば、五世紀倭国の像は、これまでより、もっとクツキリと浮かび上がってくるかも知れない。

これまでの論議でも分るように、倭の五王は、宋に貢物を贈って官爵を求めたが、五王の最後の武について、宋書は次のように記述している事が分っている。

それは、「興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事、安東大將軍倭国王と称す」と

いうものである。

日本古代史専門の、森公章東洋大教授によれば、周辺諸国が官爵を申請する際は、先ず希望する官爵を仮に自称し、正式な任命を求めたというが、倭国の場合は、自称の称号はすぐには認められなかったので、何度か遣使を重ねたうえで、希望に近い官爵を、やっと授与されているという。

それは、中国の東を守る安東大將軍と、倭国王のほか、倭及び百済や新羅などの朝鮮半島の国々を合わせ、七国での軍事指揮権を求め、結局、百済以外の六国については認められ、戦争の際に、諸国の軍の上に立つことを認めるといふ、お墨付きである。

さて、これまで色々述べてきたが、それは、「倭の五王」と言うのは一体誰なのか、という事になるが、要約すれば、宋書の記述が事実に近いようで、宋書は歴史書ではあるが、神話的な内容は殆どなく、あらゆる史料から事実だけを調べ上げて書かれていると言

われるものだといわれている。

それは、「珍」と「済」の血縁関係を、一切記していなかったこともそうだし、四一三年に「讚」が東晋に朝貢したということも、事実ではない可能性が高いため、宋書に何も書かれていないのは、その著者である「沈約（ちんやく）」は、史実に非常に忠実な人だったので、彼にしてみれば、100%事実でなければ記述したくなかったのだろう。

それから判断すれば、讚と珍は間違いなく兄弟で、兄弟で天皇になったのは、「履中と反正天皇」と「安康と雄略天皇」の二組で、後者の「興武兄弟」は、既に安康と雄略天皇に決まっているので、その間に允恭天皇をはさみ、「讚珍兄弟」は自動的に、履中と反正天皇という事になってしまふのだ。

勿論これが、100%正しいと断言できる訳ではないので、今では、「倭の五王の謎」は謎のまま、暫く結論がでないのかもしれない。

令和三年五月